

「小野小町」考

赤羽根 龍 夫

業平は確かに類まれな美男であった。正史である『三代実録』に「体つきや顔たちが品よく美麗で、性格は放縦不羈、小事に拘泥しない」と書かれてあることによって、そのことは証明されている。能面の「中将」は在五中将であつた業平の顔を写してあると言われている。中将の面は室町時代に定型が完成したと言われているが、平安貴族や中世の公達の代表的美男子の相貌を写していることは確かで、業平も恐らくあのように端正な、デカダンに満ちた顔をしていたに相異なるまい。

しかし、小野小町が絶世の美女であつたという証拠は何もない。小町について信頼できる記事は『古今集』「序」の次の評語しかない。

小野小町は古の衣通姫の流（系統）なり。あはれなるやうにて、つよからず。いはば、よき女の悩めるところあるに似たり。つよからぬは女の歌なればなるべし。

しかしこの小町評は古今集「真名序」に「小野小町之歌、古衣通姫之流也」とあるように、小町の歌について言われたことであつて、「容姿絶妙れて比無し、其の艶しき色、衣より徹りて見れり」といわれた衣通姫の美貌まで小町が受け継いでいると言っているわけではない。国宝「佐竹本三十六歌仙」の小町像は、十二単衣をつけてうしろを向いている。それなのに小町はさまざまな伝説を負わされている。美人・好色・驕慢・流浪・零

落、あげくの果には鶺鴒となつて薄の原に身を横たえるというのである。鴨長明の『無名抄』には、在原業平が奥州に下り、八十島という所で旅宿した時のこととして次の話がみえる。

野の中に歌の上句を詠ずる声あり。そのことばにいはいく秋風の吹くにつけてもあなめあなめ（ああ眼が痛い／＼）

といふ。あやしく覚えて声をたづねつつこれを求むるに、さらに人なし。ただ死人の頭一つあり。翌朝、なほこれを見るに、かのどくろの目の穴より薄なむ一本生ひ出でたりける。その薄の風になびく音のかく聞えければ、あやしくおぼえて、あたりの人にこのことを問ふ。ある人語りていはく「小野小町、この国に到りて、此所にて命終りけり。すなはち、かの頭これなり」といふ。ここに業平、あはれに悲しく覚えければ、涙をおさへて、下句をつけけり。

小野とはいはいはじすすぎ生ひけり（もう小野とはいはいまい。薄がこんなにはびこってしまったのだから）

とぞつけたる。その野をば玉造の小野とはいひける。

業平と小町との関係を示す確実な資料は何もない。しかし近代の学者の中でも関谷真可禰、窪田空穂は二人の恋愛関係を認めており、窪田章一郎は二人は歌の贈答をしているといい、前田善子はいくらか控え目に、業平

は「殊に和歌の上手で、好色の聞えの高い人であるから、一世の麗人小町と、実際に交渉がなかったとは思はれず、必ずある程度の恋愛関係はあったものと考えられる」としている。また片桐洋一⁽⁵⁾は「最高の美女が最高の美男と会わないのがおかしく、会えば必ず何かありそうだが、残念ながら、その徴証はまったく知りえないのである」という。私の考えはそのいずれとも異なっている。もし小町と業平が恋愛関係にあったとすれば、二人とも当時の有名人であったのだから、もっと確実な、資料的にも証明出来るエピソードが「伊勢物語」なり「小町集」なりに残されていると思うのである。したがって二人は何の関係もなかったと考える方が適当なのではないだろうか。小町は絶世の美女でも好色でもなかったからこそ、希代の美男、色⁽⁶⁾ごのみの業平は小町に関心を示さなかったのではないだろうか。角田文衛や片桐洋一のように厳密な考証を重んじる学者さえも小町を「相当な美人」とか「最高の美女」としているが、私は本当の小町は絶世の美女ではなかったと考えた方が、小町の実像はとらえやすいと思っている。小町が絶世の美女ではないと言っても、美女伝説が無意味であると言っているのではなく、小町がなぜ絶世の美女と言われるようになったかを知りたいと思うのである。そしてそこにある歴史の論理を探りたいと思っている。

しかにとに角、小町は現代に到るまで「絶世の美女」であり、長い間、業平と恋愛関係があると信じられ続けて来た。

それではいつ頃から小町と業平とが結びつけられて考えられるようになったのだろうか。鎌倉時代の『伊勢物語』の注釈書はどれも、「伊勢物語」は業平の本当の一代記であり、登場する人物はすべて実在の人物で、特に「色好みなる女」は小町のことであるとして当時の実話を再現しようとする。

業平はなかなか会ってくれない気の多い小町と、何とか夫婦となって常盤^わの里に住んだが、小町は一人の男では満足できぬ色好みの女で、宵ごと^{よごと}にかはづのあまた鳴くように毎夜多くの男が通ってくるので、業平は小町が心がさだまらなさと恨み、小町もまた業平の心がさだまらなさと恨み、ついに小町は業平を捨てて大江惟章の妻となって筑紫へ下って行ったが、後に宇佐の勅使となって下向した業平と再会し、自らの境遇をはじて尼となり、何れともなく身を隠した、というのである。

このように「冷泉家伊勢物語注」などの鎌倉時代の注釈書から生まれた小町説話も、美人好色伝説・美人驕慢伝説・美人流浪伝説などの小町伝説を形成する上で、大きな役割をになったのである。そして平安時代の末に既にいろいろな形で流布されていた仏教説話風の美人鬪^{どく}體伝説と合わさって、先にあげた長明の「無名抄」のような説話を形成していくのである。

しかし実のところ「伊勢物語」で小町のこととされていることの中で、実際に小町と関係あるのは、「古今集」に小町の歌として載せられている二つの和歌だけなのであり、そしてそれは業平とは何の関係もないのである。その一つ『古今集』の六二三番の小町の歌の一つ前に業平の歌が偶然に並べられているのを利用して、「伊勢物語」の作者は一つの歌物語を作りあげる。

昔、男ありけり。「逢わじ」とも言わざりける女の、さすがなりける（いざとなると逢おうとしなかった女）がもとに、いいやりける。

秋の野に笹わけし朝の袖^{そで}よりも あはで寝る夜ぞひちまさりける（秋の野の笹を分けて帰る朝帰りの袖が露にぬれる以上に、あなたに逢わないで一人寝る夜の涙の方が、私の袖をよけい濡らしますよ）

色好みなる女、返し、

みるめなきわが身を浦としらねばや かれなで海^{あま}人の足たゆく来る

(海松藻^{みるめ}が生えていない浦だと知らないで漁師が海草取りに何度も足を運ぶように、逢い見る気のない私と知らないで、あなたは足がだるくなるほど通って来るのですね)

第二十五段

もともとは古今集に二人の歌が偶然に並べられていただけのことであつたのに、そして、それを利用して一つの歌物語を虚構した「伊勢物語」の作者は、その話が業平と小町のことであると言ったわけではないのに、「伊勢物語」の享受と解釈を通して業平と小町とは恋愛関係があつたことになり、「伊勢物語」の中の色好みの女はすべて小町のこととなり、足がだるくなるまで男が通いつめるのを拒否する女という歌のイメージから、いわれるままに百夜通いつめても会えないで狂い死にした深草の少将の「百夜通いの説話」の相手は小町だということになってしまった。この歌からも、色好みな、相手をはねつける驕慢な女という小町像が出来あがつてしまったのである。

小町のもう一つの歌は「古今集」巻末のいわゆる墨滅歌^{すみけうた}の中に入っている歌であるが、「伊勢物語」の百十五段はこの歌で次のような物語を虚構する。

昔、陸奥^{みち}の国にて、男、女、住みけり。男、「都へいなむ(都へ帰りたい)」といふ。この女、いと悲しうて、馬のはなむけ(別れの宴)をだにせむとて、おきのゐで都島^{みやじま}といふ所にて、酒飲ませてよめる。

おきのゐて身を焼くよりも悲しきは都しまべの別れなりけり

(赤く燃えた熾火^{おきび}がくつついて身を焼くよりも悲しいのは、都へ行くあなたと別れる島辺のような私の悲しみです)

第百十五段

中世の「伊勢物語」の注釈書は、この女を小町と解することにより、小

町が奥州に流れ住んでいたことになり、小町の出身や老後のことに關して奥州との關係がいろいろ取りざたされるようになる。

こうして、片桐洋一が『小野小町追跡』で言うように、「伊勢物語」の享受を通して小町における好色のイメージがはっきりしてきたのである。しかしその萌芽は、平安中期には既に成立していた小町の歌と仮託された歌をまとめた「小町集」にあると片桐は主張し、さらに「小町集」には彼女の死後間もない頃から既に始まっていた小町の説話化が反映しているとする。こうした考え方には私も賛成であり、「小町集」の小町は、既に實在の小町ではなく説話の主人公としての小町になっていた」という彼の主張は私もその通りだと思つてゐる。しかし『小町集』の生成が小町説話の形成に深くかわつてゐるような見方をした人は今までにいなかった」といい、それを彼独自の説として提示する時、私は彼の説には反対である。

「小町集」は小町説話の形成にかかわつてゐるのではなく、反対に小町説話を藤原摂関政治時代の女房文学風に弱めてしまつてゐると私は思つてゐる。

そのことを小町の夢の歌からみてみよう。小町の夢の歌は「古今集」の卷十二・卷十三に三首ずつまとめて載せられている。

- ① 思ひつつ寝ればや人の見えつらむ 夢と知りせば覚めざらましを
- ② うたた寝に恋しき人を見てしより 夢てふものは頼めそめてき
- ③ いとせめて恋しきときはうばたまの(枕詞)夜の衣^{ころも}を返してぞ着る
- ④ うつつ(現実)にはさもこそあらめ(そうであらう)夢にさえ人目をよく(避ける)と見るがわびしさ

- ⑤ 限りなき思ひのままに夜もこむ(行きましよう)夢路をさえに(ならば)人はとがめじ

⑥ 夢路には足もやすめず通えども うつつに一目見しごとはあらず（一目見た方がいい）

これらの小町の歌は夢の持つ呪術的な力が未だ残っていた時代によまれた歌らしく、夢が積極的な自足した世界を持っている。とくに前の三首の歌は夢の中でこそ恋しい人との出会いが完成しているようなところがあり、古今集以降の夢の歌のように夢がはかないものの代名詞とはならない。

①の歌は、恋しい人を想いながら寝たからその人と夢の中であえたのであり、覚めてしまっておしことをしたと大らかに歌っている。②の歌は、ふとしたうたた寝にも恋しい人に会えたので、夢はやはり頼りになるとうれしがっており、③の歌は、恋しさが募ったので、衣をうら返して寝れば夢で想う人に会えるといわれているとおりに、自分もしまじょうと歌っているのである。しかし一般的な解釈は私と異なっている。その一例として目崎徳衛⁽⁷⁾と秋山虔⁽⁸⁾をあげてみよう。

目崎は①のうたの焦点は下の句の「夢と知りせば覚めざらましを」にあるとし、「覚めると同時に痛切な悔恨に襲われ、その悔恨が一首の主題となる」といい、秋山は、夢の世界での逢いはしよせん夢であるから、さめるとともに泡沫のように消え去るものであることは自明のことであるとして、「けだしこのような歌は、現実での愛への絶望を基点として発想されているというべきではあるまいか」と説く。②の歌では、目崎は小町が本当に夢をたよりにしていたわけではないといって、「夢てふものは、という言い方には、こんなにはかなく頼りないものさえも、という心根がのぞいている」とし、秋山は「現実の恋のいかんともしがたいかのなさを前提としているのであり、そうであるがゆえにひたすら夢に期待を寄せていく」と主張する。

結局、目崎は「小町は確かに夢の空しさを知悉していた。二首を合せてみれば、空しいものと知りながらなおこれに縋る他ない女心のあわれさが胸に滲みる」といい、秋山は「現実での恋の絶望から、転じて夢の世界にわがいのちを回復してゆこうとする姿勢」を小町の歌にみているのである。二人とも小町は夢の空しさを知っていながら、現実への絶望ゆえに、はかない夢をたよりにしたり、さらに「逆に夢の優位性を仮託していく」（秋山）と考えており、そこに小町の歌の独自性をみていこうとしている。しかし私には小町の夢の歌に「現実での恋の絶望」（秋山）とか「独り小町のみが歌い上げた悲劇的に暗い嘆き」（目崎）があったとはどうしても思えないのである。そうした絶望や暗い嘆きは、後の女房伊勢や和泉式部にはたしかにあったが、小町とは無縁なものである。作家の竹西寛子⁽⁹⁾が言うように「小野小町の夢の歌は、悩めるよそおいにもかかわらず、夢への期待にどこか楽天性が漂っている」のではないだろうか。そこに私は小町における古代性をみるのである。小町がすでに夢の空しさを知悉していたのではなく、小町において始めて夢の空しさの自覚ということが起こったのである。それが「夢てふも」という言い方なのである。小町自身はあくまで衣通姫の流れとして古代的な夢をうたっておりながら、既に古代は終わろうとしており、藤原摂関政治時代という日本の歴史の流れの中の一大転回点が始まろうとしているのである。古代の夢は小町において醒めかかっている。新しい現実しかしまだその本来の姿を示してはいない。夢と現実との交代劇が静かに小町の中で起こっているのである。そこに後の三つの夢の歌群にある「うつつ」の認識がある。

④は、「うつつ」現実では仕方ないとしても、夢にまであの人が人目を気にして会いに来ないのを「見るがわびしさ」、見るのがわびしいと言っているのである。目崎は「見るがわびしさ」という「小町の歌には少ない

体言止は、いかにも覚めて後ガツクリと闇にくずおれている姿を彷彿させる」というが、私は秋山も言うような「わびしい小町の歌の詠嘆」があるとは思えない。そういう現実を心静かに「見て」いる小町がそこにいるのであって、小町はそうしたうつ（現実）を見ている自分の心のわびしさを感じているだけなのである。⑤の歌は、かぎりない恋しさのまに夜忍んで行こう、夢路までは誰も咎めまいという歌であるが、そこにあるのはたしかに現実の厳しさの認識であるが、秋山のいうような「それに切りさかれて悩みもだえるわがいのち」でもないし、また目崎のいう「切願の底にはどんなに払拭しようとしても払拭し切れない絶望が揺曳している。この絶望と諦念に裏打されることによって、『じ』の結びには千万無量の思いが籠る。すこやかに強い立ち直りは、この時の小町に望むべくもないようである」ということも考え過ぎであろう。「かぎりなき思いのままに夜も忍んで行こう」という大らかな気持ちちが小町の本当の感情であり、後半で「夢でならば誰れも咎めないでしょうから」と歌うのは、自分の大らかな気持ちを少しおさえて言いわけをしたのだと私には思える。そうよまなければこの歌を声に出して読んだ時の、すらすらと流れるようなリズムは味わえないであろう。

⑥の歌も言葉通りに訳せば「百度の夢の逢瀬も現実に見会ふことにはかなわない」ということであろう。目崎は「前二首に比べるといささか曲のない説明調であるが、連作の起承転結の締めくくりとして、夢の空しさをしかと読者に駄目押しする使命だけは果たす」という。しかし彼も指摘するように下の句は上の句のなだらかなリズムがくづれてしまっている。だから私はこの歌の小町の本当の気持ちは、前の句と同様上の句の「夢路には足も休めずかよう」にあると思う。したがって下の句の「うつつにひと目見しごとはあらず」は、本当は現実に見えた方がいいのだけれど、

と夢の中の逢瀬に生きる自分を、気はずかくふと現実にもどしたただけなのではないだろうか。秋山は、「百度の夢の逢瀬も一度の現実には如かない」と格言的な解釈を下すには問題があるとして、「小町は現実において抑圧される恋の炎に全身を焼き損じつくすのである。それゆえに、夢の逢瀬に全身をかけてゆくのであるが、その夢の逢瀬といえども、現実と違ってかわつての恋の充足は得らるべくもない」と解釈する。しかし小町はそのように現実から逃避して夢の中に生きたのではなく、夢に生きた詩人なのである。私は、目崎徳衛や秋山虔のように小町を王朝女流文学風に女々しく解釈することは小町の本質を理解したことにはならないと思う。もちろん小町は古代の夢のまどろみから覚めかかっている。そして未だはつきりと全貌を現わしていない藤原時代という現実を、おぼろげな眼ではあるけれども凝視しているのである。

さて、私は先に片桐洋一の説に反対して、「小町集」は小町説話の形成にかかわっているのではなく、小町説話を藤原摂関政治時代の女房文学風に弱めてしまっている」と主張した。そうした私の説を裏づける為に小町の夢の歌に対する私の考えを述べたのであった。小町の歌は夢の持つ呪術的な力が未だ残っていた時代に読まれた歌らしく、力強く大らかな、独自の世界を持った歌であるということであった。しかし同時にみてきたように小町を論じるほとんど全ての研究者が、小町を女房文学風の女々しい小町としてしまっている。しかしそうした、既に藤原定家から始まる文学的な小町理解は、古代の終末に生きた実際の小町とも、庶民の心の中に生きる小町説話の小町とも違ったものだと言わざるを得ない。小町説話の源流は「小町集」とは別にあるのであり「小町集」は文学的小町理解の形成にかかわっていないのである。

小町の夢の歌「うつつにはさこそあらめ夢にさえ人目をよくと思ふが

わびしさ」は「古今集」では「題しらず」であるが「小町集」になると「やむごとなき(高貴な)人のしのびたまふに」と詞書がつき、小町が、夢で会うのさえ人目を気にする高貴な人をひたすら待ちわびる女房文学的な忍ぶ恋のヒロインになってしまっている。そして「古今集」の六首の夢の歌を核として付け加えられた「小町集」の夢の歌は、夢でも現実でも満たされない力弱い哀れな調べなのである。「古今集」の「うたたねに夢しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき」の次に「小町集」では「返し」とあって次の歌が加えられている。

たのまじと思はむともいかがせむ 夢よりほかに逢ふ世なければ

小町が、「うたた寝に恋しいあなたの夢を見てから夢というものが頼みになった」というのに対し、「夢なんか頼まないで現実に出おうと思ってはどうしようもない、おまえと私は夢でしか会えない仲なのだから」というわけである。片桐洋一の言うように「夢でしか会えないのだというあはれな状況を表面に出そうとする編纂者の意図が感じられる」と言うべきであろう。この他、「現実でも充たされることなく生きているだけなのに、夢でさえあなたは私を充たしてくれない」(うつつにもあるだにあるを夢にさえ飽かでも人の見えわたるかな)「夢ならばまた逢える夜もあるだろうが、中途半端な現実ではかえってつらかった」(夢ならばまた見える宵もありなましなかなかのうつつなりけむ)など、「小町集」の小町は、うらみつらみを連綿と述べる女々しい小町なのである。片桐はそのことに関し、「おそらくは小町の歌にあらざる歌の方が、後世、より小町的だと考えられるあはれさを表わすものとなっていたのである」と説明するが、小町について想いをめぐらす人の多くは、小町をそのように女房文学的な女々しい女とは考えないのではないだろうか。小町驕慢説話のもと

となったといわれ、「伊勢物語」二十五段もその歌を核として作られ、深草少将の百夜通いの話が小町と結びつけられるものとなった「みるめなき我が身を浦と知らねばや、かれなで海人の足たゆく来る」の歌にしても事情は同じである。片桐は「小町集」にも載せられているこの歌を引用して、小町の、男を拒否し、驕慢に男を寄せつけないというイメージは「小町集」から存在していると主張するが、「小町集」にはこの歌の後日譚とも言わべき歌が数首つけ加えられ、男を拒否するイメージからはほど遠い小町像を提出しているのである。

みるめ刈る海人の行きかふ湊路に なこそ関も我はすゑぬを
わたつうみのみるめは誰か刈りはてし世の人ごとになしと言はする

みるめあらば浦みむやはと海人問わばうかびて待たむうたかたの間も

はじめの歌は、「お会い出来ますか」と言って来た男に、私は「来るな」という関所など設けておりませんと答え、次の歌は、私に世間の他の男とは会わないと言わせているのはどなたでしょうと恋する男に呼びかけ最後の歌は、男が「逢えさえすれば恨まない」と言って尋ねて来るのならば、お待ちしましょうと言うのである。そこには男を拒否する驕慢な小町は影をひそめ、海人を読み込んだ「小町集」の別の歌の詞書に、「定まらずあはれる身を嘆きて」とか「定めたる男もなくて心ほそき頃」とあるように、気弱く男を待っている哀れな小町像になってしまっているのである。

このような小町を片桐は「強い小町ではなく弱い小町、哀れな小町」といい、「小町集生成の時代、つまり平安時代中期の、特に女性たちのあはれさ、切なさをそのままに反映し、具現したものであると思う」、そしてそれが人々の心の中にある説話上の小町のイメージだという。しかしその

ような小町は断じて「我々の心の中に生き続けて来た」小町ではなく、平安中期、藤原摂関政治の中で男の権力欲の道具とされ、観念の中でしか生きられなくなった後宮女房達の、小町を我身に引きつけた誤解にすぎないのである。本当の小町説話の中の小町像は、中世の謡曲「通小町」「卒都婆小町」「関寺小町」などにもみられるように、年老いて零落したとしても若き日の驕慢、男を拒否するイメージを失わない毅然とした小町なのである。哀れであっても小町は弱くはない。

男を拒否する驕慢な小町像も、「小町集」では後宮女房たちの、一夫多妻という結婚方式の下に、男の愛情が本当のものかどうかを確かめるテクニクになり下がってしまっているのである。だから「小町集」の小町は、私を思う心が毛の末ほどにでもあれば今でもお会いしますのに（流布本七六）と訴え、あなたが忘れなければ私も忘れない（六三）、あなたが来てくれるなら私も有明の月のように待ちます（一〇二）、そして、朝夕生きている限り会っていたい（四八）と歌うのである。

これは決して実際の小町の発想でもなければ小町説話の発想でもなく、男に従属しなければ生きていけなくなってしまう藤原時代の女房たちの発想ではないのである。その中の代表的な一人、「かげろう日記」の作者・道綱の母は、「本朝第一美人三人内也」といわれるほど才色兼備の女性であったのに、「まるで正常さを失ったみたい」に求愛する藤原兼家（道長の父）を、何度も拒否してじらしたあげくに結婚を受け入れると、今度は途絶えがちな兼家のおとづれを、ひたすら待ちわびる女になってしまったのである。そして摂関政治の繁栄の隠で「心の中だけの世界」に追いやられた彼女は、夫が晴れがましく社会的に活動し、「事繁し」、仕事に忙しいということに反撥し、「事繁し」というのは、何か（何事か）、この荒れたる宿の蓬よりも繁げなりと思ひながむる」のである。それはちよ

うど「小町集」の中の小町が、世の中は飛鳥川の流れのように変わり易く無常でもかまわない、貴男と私の中だけが絶えなければよい（世の中は飛鳥川にもならばなれ君と我とが申し絶えずは）と歌うのと同じ心象風景なのである。心の世界だけに生き悶々と男を待っただけの女など、たとえどんなに美しくとも人は「絶世の美女」と讃えるであろうか。小町は決して道綱の母や女房伊勢や和泉式部のように女房文学の中で生きる女ではない。

唐木順三⁽¹⁰⁾は、女流作家が華やかに活躍した王朝期の宮廷中心の社会は、藤原北家の支配が確立した「閉ざされた社会」「停滞社会」であったという。そこでは女は、美しい女子を生むためという意味だけをもつ存在になっ
てしまい、女は自らの存在の意味を「現実の世界、歴史の世界、男性の世界とは範疇を異にするところ」に築かれた「『世の中』というロマン世界」を求めるより仕方なくなったのである。女にとって「世の中」とは「男女の間柄」に他ならないのである。

私の率直な疑問は、大抵の国文学者たちが王朝文学の中で表現されている、みやびやもののあはれを、それ自身自足した素晴らしい世界だと思ひこんでいることにある。みやびやもののあはれは藤原摂関政治を確立していく中で他氏を圧迫した藤原氏が、その代償として与えた、ささやかな美意識にすぎないのである。⁽¹¹⁾ 男たちには、政治の世界は自分たちにかまかせて、お前たちは色好みや風流などのみやびをしていれ
ばいいのだと言ひ、女たちは心の世界だけに追いやられ、そこでもののあはれという美意識だけを心の支えとして生きなければならなかったのである。勿論、王朝の女性や貴族たちは、自らに与えられたみやびやもののあはれを磨きあげ、その後の日本の美意識の伝統に鍛えあげはした。「王朝貴族の生活や趣味・教養は、一つの模範として後世に伝えられた。それはこんにちに至るまで、王朝風という名で残され、日本風というもの

のひとつの基調をなしている」⁽¹²⁾と言うこともできる。しかし、それでもやはり、そうした美意識の限界をはっきりと見てとることが肝要なのである。私には多くの研究者たちにそのことの自覚がすくないように思われる。哲学的に言うならば、認識論的にしか王朝の文学を見ていないのである。それがなぜそうになっているかという、自らの認識の根拠に迫る存在論的な見方がそこにはないのである。その顕著な例が、国文学者の大方からすぐれた小町論と見做されている秋山虔の『王朝女流文学の形成』の中の「小野小町のなるもの」である。

彼はその論文の冒頭で小野小町を「王朝女流文学史の始点に位置する」といっておきながら、小町を王朝文学的にしか理解しない。始発に位置すると言うからには、小町は古代的なものの中から生まれてきているのに、小町における古代的なものの省察が抜けているのである。彼は小町の資料として信頼できるものは「古今集」だけであるとして、古今集所収の十七首の小町の歌だけを対象とし、それをいくつかの群に分け、まず第一に「わが人生史に対する諦観をうたうところの歌群」として次の二首をあげる。

花の色は移りにけりないたづらに我身世にふるながめせしまに

色見えて移ろうものは世の中の人の心の花にぞありける

はじめの、あまりにも有名な歌に関して、秋山に限らずほとんどの研究者が「花の色」は単に美しい桜の花の色ではなく、そこにわが容姿がたとえられていると言う。したがって「花の色は移りにけりな」というとき、それは花の色香のうつろいへの哀惜であるとともに、わが盛りすぎたいのちの嘆きがたたえられており、わが人生についての愕然たる思いの表白述べであるというのである。しかし定家以来、連綿と続くこの定説に対して

私が異を説きたいのは、女性が、特に小町がわが容姿を花の色にたとえるはずはないということなのである。小町を勝手に美人と決めつけた男たちが、美人と花を対比させて絵画でもながめるように観賞しているだけなのであり、また女たちが小町とみずからをダブらせて自己陶醉をしているだけなのである。そんなナルシズムは小町にはないと私はいいたい。女が心の世界だけに追いやられ、自己陶醉という形でしか生きる意味を見い出せなかった「古今集」「新古今集」時代ならばとにかくに、現代の研究者までもそう思っているのは、私には不思議に思える。しかしまた江戸時代の契沖のように「さて小町が歌におもてうらの説有^{あり}などいふ事不用、只花になぐさむべき春をいたづらに花をばながめずして世にふるながめに過した^たりという義なり」とか、宣長のように「エエ、花ノ色ハアレモウツロウテシマウタワイナウ 一度^{いちど}モ見ズニサ」と、ただ桜の散ることに対する詠嘆とだけみることは出来ないと思う。そこには確かに人生に対する感慨があることも確かなのである。私自身の説は後に提示したいが、とも角、秋山のいうような「わが^{わが}がさかりすぎたるいのちのなげき」でも「わが^{わが}人生の経過を悔いなく内省の思い」でもない。そのような嘆きは小町の後の時代の女房文学、伊勢や和泉式部や道綱の母のような女性にはあるが、古代と中世のはざまに生きた小町にはないのである。そのことは次の「色見えてうつろうものは世の中の人の心の花にぞありける」の歌をみれば一層よくわかる。この歌は、（色見えてうつろうもの）（世の中の人の心の花）と歌っているのであり、秋山の言うように「直截簡明な『AはBである』型の表現」であり、「『人の心の花』という新しい熟語」を用いたことにこの歌の特異性がある。小町以外の他の古今集の歌で「移ろう」という語が使われるとき、「たとえば、桜の花、風に散る木の葉、秋萩のうつろいゆくかたち等々につけて、人の心の移ろいやすさ、はかなさが観

照されている」、それに対して小町のうたはA∥B、(移ろうもの)∥(人の心の花)とはじめて認識したのであり、その認識をもとに古今集のいろいろな比喩が生まれたのである。秋山はそこに「両者がいに明らかな異質性を示す」と正しく認識しておきながら、「自然の『うつろひ』が人生に関連して、ながめられるということ」で「要するに小町の歌も、古今集時代の類同的発想に依拠してうたわれている」としてしまっているのである。せっかく小町の歌の異質性を認めておきながら、結局、他の古今集の歌と同じだというのは、秋山は古今集の類型的発想でしか小町をみていないのであり、つまり認識論がなく、存在論的見方がないからなのである。

小町がはじめてA∥B、人の心は移ろうということを認識した。そのことによって小町は古代から抜け出したのである。小町以降の古今集時代の人々は小町の認識にもとずいて人の心を見る。人の心が移ろい易いものだということを、桜の花が散るにつけ、秋萩が移ろい易いを見るにつけ詠嘆するものである。しかし小町の歌に詠嘆はない。小町は古代の終わりを告げる認識、(人の心)∥(移ろう)という意識をはじめて持ったのである。古代という時代が裂けて小町において新しい時代を告げたのである。その意味で小町の歌には存在論があると私はいいたい。

「我身」という語に関しても、秋山は小町と小町以外の人々の歌とを比較して、古今集の小町以外の歌の「我身」は、散る花にたぐえて我身の無常を詠嘆したものや、秋の到来につけて我身の凋落を思いあわせて悲しみに沈む気持ちを歌うなど、「我身がもとより無常なものとして観念されている」にすぎないという。秋山が、小町以外の古今集の歌は最初から「我身」を無常なものとして規定し、それを其点として発想されているから小町の歌と異質性があると言うのは正に慧眼(けいがん)というべきであろう。しかし小

町の「我身」という語の中には、「わが不毛の愛がわびしく封じこめられている」といい、「みずからいかんともしがたくやるせない我身」、「年ふり魅力もうすれ、見すてられてゆく我身」など「小町の歌によりみこめられる『我身』は、一貫してひとりの女の愛の不毛へのうらみなげきの哀切な表情がたたえられていることばとして実質をいだいている」と説明する時、小町を王朝的認識でしか把えていないと私には思えるのである。

小町の「我身」は小町の人生史の中からだけ生まれたものではない。小町と同時代の六歌仙の他の作者さえ使っていないこの語は、古代が終ろうとしている時、新しい時代の原理として小町の歌を通して形成されて来たのである。決して小町自身の個人的な恋愛の経験から体得されたものではない。私は小町はあれやこれやの恋はしなかったのではないかとさえ思う。一人の女性を通して、その人の自我の裂け目を通して時代が新しい原理を告げる時、その女性はずっと自らの内なる声に耳を澄ませているだけであろう。小町について古今集の歌以外に何も確かなことが知られていないのは、小町は、ただ歌を作っただけだからなのではないだろうか。おそらく天皇の更衣でもなければ、だれかと熱烈な恋をしたわけでもなく、もしかしたら宮仕えさえしなかったのかも知れない。後にこれ程多くの伝説を生んだ小町が、人々の言うように絶世の美女であったり、天皇の更衣であったとしたならば、もっと多くの資料が残っていなければならぬ。それらが何も残されていないということに人々はもっと注意を向けなければいけないのではないだろうか。研究者は小町を「うであった」と決めることばかりに熱心であるが、「うではない」ということに関心を向けるべきではないだろうか。小町は古代の終焉(しゅうえん)に立って新しい時代の言葉が生まれようとしていた時、言の葉のざわめきを身に感じて、それを和歌という形で表現しただけなのである。その意味で小町は巫女性(巫女とは

神の代弁者である）を持った女性——「衣通姫の流れ」なのである。したがって私は、小町を巫女的生活から文学的生活への過渡期に位置づけた小林茂美の『小野小町笈⁽¹³⁾』の説を高く評価したい。しばらく彼の説くところによって論を進めよう。

小野小町が小野妹子や小野篁^{（たかむら）}を出した小野氏の出身であったことは一応信じてよいであろう。小野氏の源流は古代豪族の名門、和邇氏^{（ワニ）}である。

和邇氏は鰐^{（トリスム）}を族霊とする海人族で、古代の歌謡・物語を伝承管理する氏族であり、五世紀末から六世紀にかけて后妃を多数入内させている。内外の制覇・統一をめざす倭朝廷にとっては、それに不可欠な水霊統禦の霊能を、和邇族出身の後妃の霊巫力を媒介として吸収する必要があったからである。（一八・九ページ）当時の氏族は自らの由緒正しきことを誇る氏族の物語を所持しており、代表的古代豪族としての和邇氏の伝承した物語は、海水の鎮魂呪儀と歴代天皇の婚姻説話、国内外の征討譚などである。

当時の戦いは呪言呪術を駆使して相手方の精霊を鎮圧するという霊魂争い（詞争い）が中心であったから歌謡・物語を伝承管理する和邇氏に同時に武人（もののふ）の伝統があったことは、その分流氏族である小野氏の中から征夷鎮守府將軍や辺境の守りとして重要な陸奥守、出羽守などを多く出したことでも証明される。小野氏は後に、天鈿女命^{（あめのうづめ）}、猿田彦の後裔で言語呪術と神事芸能の家柄である女系の猿女君氏^{（さるめきみ）}と通婚合流して、八猿女小野氏^{（やちゐめ）}とも称すべき巡遊民団を形成し、日本の宗教文芸や芸道諸般の伝承と進展に寄与することになる。こうして小野氏出身の猿女の女性は、後宮社会と民間とに分かれて生き続けていくのである。「そしてこの二系列のあわいに実在した唯一の歌詠^{（かぎ）}」が小野小町であると言う。そして「古の衣通姫の流れなり」と許された小町は、猿女の資性を持った女性であったに

ちがいない。和邇氏の血脈をうけた衣通姫こそ、猿女、後に縫女（天皇の衣裳をつかさどる）の職能を体現した古代巫女の典型なのだから。

古代の歴代天皇は地方の豪族を征服するとその子女を采女や妃としていった。それは彼女たちの持つ霊の力を吸収してその地方を治めるためであった。しかし統一が完成すると采女の地位が低下し、縫女と同等に扱われるようになる。かわって京畿内の氏族の氏女が後宮に入っていく。一方、采女は地方に戻って行き、中央の祭りを伝える。采女の統轄の地位にいた小野氏の猿女や神人たちも都での活動の場を失って新しい活動の場を求めて漂泊巡遊がはじまる。奈良朝末期にはすでに奥州にまで足を伸ばしていたらしい。彼女たち女流神人の文芸種目は、「祖宗和邇氏から十数名の皇妃を出した過去の栄耀を象徴して、たとえば衣通郎姫伝承——兄姫・弟姫物語にみるごとき麗し^{（クラ）}女の、尊貴者とのロマンスが語りの眉目^{（びもく）}とされた。……もうひとつの主流は、太陽神奉仕の『猿女』的資性を継承した美貌の歌詠みの驕慢・好色・流浪・零落といった人生の閱歴譚を、神や仏の霊験譚にのせて、懺悔様式で語る文芸が人気を博した」。

没落して地方を漂泊巡遊する猿女たちは、かつての父祖の栄光を歌い、同時に自らも、もとは都の貴公子に愛された美姫であったが、驕慢・好色ゆえに零落して今こうして流浪しているのだと、信じ易く素朴な東国の田夫野嬢に涙ながらに語ったことであろう。小町の誕生以前にそうした唱導活動をしていた彼女たちは、都で同族の小野小町が優れた歌よみとしてもてはやされると、小町を自分たちの語り物のヒロインとして取りこみ、衣通姫伝承と重ね合わせて絶世の美女・希代の歌よみという小野小町像をつくりあげ、小町の死後も自らの零落・流浪を小町のそれとして語り、やがていつの間にか自分が小野小町となって各地を漂泊巡遊したにちがいない。そう考えてこそ全国各地に小町の墓が散在する理由も説明できるので

はないだろうか。

片桐洋一は小町説話は小町の死後まもなくして編纂が始められた小町集のころから成立はじめたと説き、小林茂美は小野流神人の唱導文芸の中に生存中の小町さえかつぎ出されたかもしれず、古今集撰進の頃ならすでに小町の説話化が整いつつあったろうと推断している。私は小林茂美の説をさらに発展させる形で、小町説話は古事記や日本書紀の時代には既にあった衣通姫伝説の中から生まれてきたのだと思っている。衣通姫伝承の中でその時代にふさわしい新しい衣通姫として小町が蘇ったのであり、それゆえにこそ小町説話の中に絶世の美女・衣通姫の伝承が重ね合わされているのである。それはちょうどヨーロッパの歴史でいえば救世主（キリスト）の出現を待ちわびる人々の中のキリスト伝説の中からイエスが誕生することによってイエスがキリストとされたような発想形態ではないのだろうか。現代、ほとんどの人々は小町の名は知っていても、そう言えば絶世の美女であったらしいと言うだけで、生き生きとした形での小町像は失われかけている。一昔前まではどの町にもいた小町娘という言い方も今では死語になりつつある。美しい女を見ても小町のようなと思わなくなったのは、ずいぶん長い間続いた着物の時代が終わり告げたからなのではないだろうか。しかし、現代は小町にかわりうる新しい「絶世の美女」像をもちえていない。小町が我々の心から去って久しい。新しい小町はまだ生まれていない。今、小町とは何なのかと問うことは、小野小町への晩歌であると同時に、新しい小町創造のエネルギーを求めることでもあるのである。その意味でも私は小町の背景に「衣通姫の流れ」としての古代の巫女性をみる小林茂美の小町論に深い感銘を受けている。しかし彼の、小町の歌の語句一つ一つの背景に個的意識を超えた次元の儀礼や習俗伝承とか、それ

にもとづく伝統的発想様式をさぐりあてるといふやり方にはついて行けない。彼が「小町という女性の個性的な伝記は成り立たない。没個性的な総合的人格者という視点から、彼女にまつわる伝承なり文芸なりを理解せねばならない」という時、小町を伝承の中に埋没させてしまうことになる。たしかに小町は衣通姫伝承の中で生まれてきた女性ではあったが、それを断ち切り新しい小町像を創造した女性なのである。その意味で小町は巫女から文学へのあわいにいる女性ではなく、文学への時代を開いた女性なのであり、「小町という女性の個性的な伝記」を探究する努力は意味があると言わなければならない。

私は先に、小町は自らの身体の奥深くで新しい時代が言葉になっていくのをただじつと感じ、それが歌になっていくのに耳を澄ましていただけたであろうと言った。したがって小町はあれやこれやの恋はしなかったであろうし、小町の人生史からだけ小町の歌を見ることは適当でないと言った。しかしそのことは小町が何もしなかったということの意味はしない。小町はある人物——古代の終焉に立って、最も古代であった或る偉丈夫を、想い深くじつと見ていたのである。見るということこそ小町がなし得た最大のことであった。

古代人にとって「見る」という行為は、「月見」「花見」という言葉によって表現されているように、見ることによってそのものの生命力を感染的にとりこみ、自らの生命力を強化するという呪術的意味があったのである。万葉集には「見れど飽かぬ」「見つづ偲ぶ」「見れば貴く」「見れば清けし」など、見るという語が数多く使われている。しかし古今集になると、見る^まにかわって、思う^{おも}が頻りに出てくるようになる。唐木順三⁽¹⁴⁾は「万葉集において数多く使はれている『見る』及びそれに関係する言葉の喪失において古代というものの終焉を感じる」という。人間が自然との具

体的で生き生きとした関係を失って、次第に観念的になっていったといえよう。そしてその過渡期にいたのが小野小町であったと私は思うのである。古代の終焉に立って、小町は、最後の古代人ともいえる偉丈夫をじっと凝視していた。そしてその凝視は小町の心の深く沈潜し、「想い」となって蘇生して来たのである。

想いつつ寝ればや人の見えつらん 夢と知りせば覚めざらましを

小町のうたには深い凝視と、静かに燃える心がある。それでは一体、小町は誰れを、想い深く凝視していたのであろうか。

小野篁——室町時代末期に出来た「小野氏系図」では、小町の祖先として敏達天皇、小野妹子などをあげ次のようになっている。

〔峯守——篁——良真——小町〕

すると小町は小野篁の孫ということになる。この系図について検討する前に篁について記しておきたい。篁は古代史の中で空海と並び称される多芸多才な偉人であったが、十四歳の時、陸奥守になった父峯守に従って任地に下った折には、原野を馬で疾駆することにのみ熱中していたという。帰京後も学業をおろそかにしたので彼の才能を惜んだ嵯峨天皇が「既に其人の子と為る、何ぞまた弓馬の士と為さむ」と嘆いたことを耳にすると発奮して学問に精を出し、二十一歳で文章生に選ばれ、二十三歳で巡察使彈正、二十九歳で藏人、三十一歳で従五位下と位を進め、後に参議となったため野相公とか野宰相といわれた。身長六尺二寸の偉丈夫で文武両道に秀いで、文章はこの人の右に出るものはないと言われ、漢詩は唐の白楽天に比べられ、書は王羲之・王献之の風格があると言われた。生来、多情多感・不羈放奔な性格で齒に衣を着せぬ直言を好んだため、世人は野狂とあだ名した。正に空海と並び称される最後の大古人と言うべきであらう。後

に遣唐使に命ぜられ遣唐副使となるが、大使藤原常嗣の横暴な乗船交換に「大使は最初船を定める時、自分で最も良い船を選びとっており、それが漂流すると今度は乗船を交換して篁に危険な船を配当しようというのは自分の都合のよいことばかり考え他人の危険を省みないことであって人の情に背くことである。」（文徳実録）と抗議して乗船を拒否して家に閉じこもり、おまけに遣唐使の制度そのものを風刺する詩まで作ったので、嵯峨天皇の逆鱗に触れ、隠岐島に流される。時既に藤原氏は自らの権勢を確立しつつあり、宗教の世界に生きた空海とちがい藤原氏と同じ政治の世界に生きた篁は、自らのすぐれた才能を生かし切れなかったことは正に惜しむらくと言わねばであらう。そのため彼はかえって「篁物語」「江談抄」「今昔物語」「古事談」「宇治拾遺」などの中に説話の主人公として不可思議な姿を現わしている。その中で『今昔物語』にみえる話は次のようなものである。

小野篁があることで朝廷から処罰を受けた時、藤原冬嗣の五男の西三条大臣が何かにつけて篁のために弁護してくれたのを篁は心中、ありがたいことだと思っていた。そのうち大臣は病気で死んで閻魔大王の前に連れて行かれた時、見るとずらりと並んでいる閻魔大王の臣下の中に篁が交じっている。大臣が驚いていると篁は閻魔大王に大臣の命ごいをしてこの世に連れ戻してくれ。生き返った大臣はあの世でのことが不思議でならず、ある時そつと篁に聞いてみると篁はちょっとほえみ「先年のご親切がありがたかったので、そのお礼をしたまでのことです。このことは人には仰せくありませんように」と答えた。大臣も、この話をもし聞いた世間の人々も「篁は閻魔王宮の臣として、あの世とこの世との間を行ききしている人なのだ」とだれもが思っただけの恐ろしい話である。

同じような説は「江談抄」などにもみえ、この世では藤原氏の影で多才

な能力を発揮できなかった小野篁を、当時の人々がどう思っていたのかという一端がうかがわれて興味深い。この他、異母妹との悲恋を題材にした『篁物語』があり、それをもとにして前田善子は、篁こそ小町の父ではなかったか、という仮説を提出する。

『篁物語』によると、小野篁が大学の学生であった時、親が大事に育てていた異母妹に学問を教えることになり、はじめのうちすだはれ越しに^き几帳をへだてて話をしていたが、いつしか恋愛関係になり、和歌の贈答をしているうちに遂に妹は妊娠してしまふ。父は「のどかなりける人」であったので二人の仲を許そうとするが、母は妹を部屋にとじこめて篁と逢えないようにしてしまう。やがて妹は悲しみのあまり悶死してしまい、篁は悲しんでその霊をとむらっていると夜毎に妹の魂がやって来て語り合ったが、三七日の間は鮮やかにみえた妹の魂が四七日になると時々になり、三年たつと夢にも確かには見えなくなった。かくして悲しみもうすらぎ、今度は時の右大臣に娘をくださいと手紙を出し、姉二人にはねつけられたが末の娘を得て、やがて出世する、という筋であり、最後に「これなむ篁なりける。才学は更にも言わず（言うまでもなく）、歌作る事も得たり^え顔に、この国の人には足らずぞ有ける。この子孫の子（曾孫）でかく歌詠まぬは無かりけり。」とある。

前田善子はこの話をもとにして「篁物語に拠って描いた小町の仮像」を試みる。彼女はそれを一つの推定あるいは一つの夢にすぎないと言うが、彼女も言うように「従来の諸説によって解決出来ない部分が、比較的矛盾なく解される点」にこの説の良さがある。

まず小町の家系について、小野氏系図の篁の孫とする説は年代の点に矛盾があるので従えないが、小野氏は篁はじめ、美材・好古・道風など多才の血統であり、ことに篁は詩歌においては一世に秀でた人であるから、小

野小町は小野氏から出た才媛とみることは不自然ではなく、小町の和歌の才能は篁の血よりうけ継いでいると解することもまた自然であるとする。

また、篁物語はことごとく事実とすることは出来ないが、篁物語で異母妹との恋愛をうたった三十一首の和歌のうちの中の七首が、勅撰集の中に小野篁作として入れられており、その詞書によって、妹の美貌——妹のをかしき（優美さ）を見て書きつけ侍りける——、妹と篁との恋愛——妹のかげだに見えてやみぬべく吉野の河は濁れとぞ思ふと申し侍りければよめる——、妹の夭折——妹の身まかりける（死亡した）時よみける——という事実が認められる。また右大臣に手紙を出してその娘を手に入れるということも「本朝文粹」によって確認されるという。そこで前田善子は、物語中の篁と異母妹との間に子供が産まれたということを事実として取扱うことにより、「小町は篁の娘である」という説を提出するのである。

かやうに^よ産れ落ちるときから、暗い影をその身に荷ひ、父親の優れた芸術家的な血と母親の美貌とをうけて、わが絶世の佳人小町は生れ出たのである。母のない子は峯守の膝下で、その末女の妹として養育され、比古姫と呼ばれた。三年すぎて篁は右大臣の^{むすめ}婿となった。その後いく程もなく、比古姫も宮中に召され、中流貴族の女房として、その姉と共に后町の一に小さき局を賜はり「小町」と呼ばれるやうになったが、その天稟の和歌の才と、天性の美貌は、行末の女御・更衣のやんごとなき列を約束され、多くの殿上人の心を悩ませた。これが小町の全盛時代であり年は十七八頃と思はれる。承和五年、篁配流となるや、その最も近親である小町は、悲しくも肩身狭い身となり、宮仕への心も重い明暮であった。憂愁のうちにも、やんごとなき人御ひとりの、ひそやかな御情けに縋^{かか}って、淋しい宮廷生活を続けてゐたものと思はれる。承和七年、篁は都へ喚び返され、八年本爵に復されたが、機会は永久に去って小町の上

に「雲井のうちにまぢる」運命はめぐって来なかった。(217ページ)

前田善子はさらに続けて、その後小町は一女房として宮廷えを続けているうち、遍昭・業平・安倍清行と恋愛の交渉をもち、仁明天皇崩御後は宮中を下って里に住む身となり、三十二歳の時に石上の寺で遍昭と再会して歌を贈答したとか、一族の小野貞樹と恋愛をしたとか、四十四歳で文屋康秀に三河に下向する事を誘はれ、最後は井手寺で六十九歳で淋しくもやすらかにこの世を去ったと小町の一生の仮像を描きだす。しかし私は彼女の仮説のうちで小町の生年と、篁の娘説に大きな関心を持つだけであって、様々な恋愛や、「やんごとなき人」との関係には私の立場からは賛成出来ないのである。小町の出生を八二〇年(弘仁十一年)頃とする説は、その後多くの研究者に支持されている。しかし旧来の采女説に対して出された中臈女房説に対しては、角田文衛は、何々町という名を帯びた婦人は出身が国司階級に属するという事は証明されても、女房であったという事実は導き出されないと批判する。また小町を篁の孫とする以前の説は年代が合わないということには賛成しながらも、前田善子の篁の娘説は、古今集によると小町には姉がいたことになるので、小町が生まれたと推定される年に篁は十九歳であるので、異母妹以前に別の愛人を持ち、十六、七歳で子を生ませたことになり、いささか無理であるとして、「小町を篁の娘とみなす仮説は、甚だ魅惑的であるけれども」賛成できないとする。しかし目崎徳衛もいうように、古今集の「小町が姉」という作者名は異様な書き方で、歌の中に「小野」が詠み込まれている(「時すぎてかれ行く小野の浅茅^{あさぢ}には今はおもひぞたえず燃えける」)ことをヒントにした仮託と考えれば篁の娘説を批判する理由にはならない。

一方、角田文衛は自説として、小野小町は「続日本後紀」の承和九年正

月八日に正六位上を授けられたと記録のある小野吉子であり、同日正六位上を授けられた藤原賀登子と同じ更衣であり、また小町の父は出羽守小野滝雄で、母は滝雄の現地妻××良真の娘である比古姫であるという説を提出したが、その説に対して片桐洋一は、小町が小野吉子であるという可能性は非常に高いが、もし小町の「小」にこだわるならば小町の姉が仁明天皇の後宮にいないければならず、小野吉子は小町ではなく姉の「小野の町」であるという岡一男⁽¹⁵⁾説の可能性もあるとし、一方、小町の父が小野滝雄であるという角田文衛の説は「考証と称すべきものではない。推理小説としても程度の悪い作品である」と決めつける。片桐自身は「小町が仁明天皇の更衣であったこと、そして嘉祥三年(八五〇)仁明天皇崩御後は自由の身となり、古今集恋五・七八三番が示すごとく小野貞樹などとも関係を持ったらしいこと、そして遍昭・康秀など、仁明朝の文華を懐しむ人たちとも時々交渉があったらしいことなどは、まずまず誤りのないところだろうのである」としている。一方、小町の父に関しては全く不明というほかはないが、ただ篁と小町は「父と娘であれば有り得る年齢差」であることは認めている。このように小町に関しては諸説入り乱れているのである。しかし小町が生まれたのは八二〇年頃だということ、小野氏の出身であったということ、歌の系統として「衣通姫の流れ」であること、篁とは親子ぐらいの年齢差であること——以上のことは今日では一応通説と認めてもよいであろう。

昭和十八年に前田善子によって篁の娘説が仮説として立てられた以降も、小町の出自に関して様々な説が提出された。その中には自説こそ確実であると主張するものもあるが、私には彼女の説を超え得たものは一つもないように思われる。しかし彼女も篁の娘説を一つの夢と語るように、今のところ小町が篁の娘である確証はなにもないのである。もっとも横田幸

哉も前田と同じ篁の娘説をとり、莫大な考証をもとに自説を事実であると

主張しているが、彼の立論の根底には根本的な誤りがあるように私には思われる。それは彼が「小町自身の百首にのぼる和歌の解剖」を行うとして、小町集の歌をことごとく事実としている点である。そのように小町説話を事実として考証していくならば、どんなに莫大な資料を検討したとしても、小町説話を作りあげた人々の奔放な想像に突き当たるだけで、決して小町の実像にはたどり着かないのである。

しかし実のところ私自身も前田善子の「篁の娘説」という仮説を捨て切れないのである。というのも小野氏系図の（篁——良真——小町）に何かひっかかるものを感じるからなのである。この系図を書いた人物がいつ頃の時代の誰れだかは分からないが、小町を篁の孫とすることは年代的に無理があるということを知っていたに違いない。それなのにあえて二人の間に良真という仮空の人物を入れたのは、小町を篁の娘とは出来ない理由があったからではないだろうか。小野氏系図が（篁——良真——小町）としていることが、実は（篁——小町）を暗示しているように私には思えるのである。それでは、小町を篁の娘とは出来ない理由とは何なのであろうか。前田善子の言う小町が異母妹の子供であったからとも考えられる。異母妹との結婚ということは「古事記」の伝える軽皇子と衣通姫という同母兄妹の悲恋の話にみられるようなタブー（禁忌）ではなかったとしても、小町を誇り高い小野一族の最後の英雄、篁の子とすることは許されなかったのかもしれない。あるいは又、後代の系図の作者が、一族の誉れでもある小町に、彼女の死後、好色・驕慢など不名誉な様々な説話がつけ加えられてしまったので、小町を誇りに思うと同時に恥に思うという気持ちから、素直に篁の子とすることが出来なかったのかも知れない。しかしこれにせよ小町が篁の娘であるという確証は何もない。

そろそろ私は私自身の説を提出しようと思う。私には小町と篁とは普通の親子以上の関係があったように思えてならない。

小町は篁を心の奥深くに秘めて想っていた。彼女は生涯を通じて篁だけを凝視していた。これが私の仮説である。だから小町がたとえ篁の子供であったとしても構わない。生まれた途端に引き離され出羽の国の小野氏の係累に預けられ、少女になって篁のもとに呼び戻された篁の「隠し子」であったかも知れない。あるいは篁の子ではなく、一族の長である篁をたよって都に預けられた出羽の国の小野一族の誰れかの子であっても構わない。とに角小町は二十歳ほど年の差のある父か伯父かも知れない篁を、ただひたすら想い深く見つめていたのである。たとえ小町の気持ちが悪であったとしても、篁にその気がなければ二人の間に愛が芽生えるはずもない。確実に小町の恋人と言える男は一人もなく、小町が宮廷えしたと思われる確かな記録もなく、小町についての資料は古今集の十七首の歌だけであり、それらの歌の詞書から判断されることは小野貞樹や文屋康秀と交友関係があったらしいという事だけであるということは、小町は特定の誰かと熱烈な恋もせず、宮仕えもせず、まして天皇の更衣などではなかったのだと思う。ただ篁の庇護のもとに、さすが小野氏の係累だけあり歌の上手な娘として、篁の周りにあった歌のサロンの人気者——そこに小町という名の由来がありはしないだろうか——として喝采を得ていたのではないだろうか。そして小町自身は歌をよむ以外には何もせず、最後の古代人とも言える、まるで古事記の中に出てくる神々のように激した人生を送る篁をただひたすら、想い深く見ていただけたのではないだろうか。そして転変する篁の人生に、小野一族の運命と人間そのものの運命を凝視していたのである。小町好色伝説と共に、小町穴なし伝説——小町は男を知らなかった

たという伝承が各地に根強く流布されてあるが、私はそこに何か小町の真実の一端が隠されているように思えてならない。小町が本当に男を知らなかったかどうかは別として、好色と言われるより穴なしと言われることの方が、小町の本当の姿に近かったであろう。篁のような巨大な偉丈夫を想い深くみつめている小町にとって、世間の男との恋愛など物の数ではなかったであろう。特定の男性との関係がなければ、後の世の伝説の中では、貞樹であれ業平であれ、どんな男とも関係があったと言えるのである。だから私は、穴なし伝説を核にして小町好色伝説が生まれたとさえ思っている。宗教的に言えば「聖」は「性」に転換するということを思い起こすならば、人々は好色伝説中の小町の中に「聖なるもの」を感じているのではないだろうか。

今まで述べてきたような意味で私は、小町を「衣通姫の流れ」と考えており、小町の歌を通して時代が自らを告げたという意味で私は、小町を巫女性を持った歌よみと言いたいのである。

そのことを、古今集の撰者である紀貫之はよく知っていたのだと思う。古今集の雑歌の九三六番、九三七番、九三八番に小野氏の三人の歌が一括して採録されている。小林茂美も言うように、その三首がともに厭世の悲観詠であることは注目に値する。

小野篁朝臣

しかりとてそむかれなくに事しあればまづ歎かれぬあな憂世の中
(そうだからと言って逃げ出すわけには行かないのに、何か事があれば
ばすく歎きたくなるよ、ああいやだこの世の中は)

甲斐守に侍りける(であった)時、京へまかりのぼりける人に遣はし
ける

みやこ人いかかと問はば山高み晴れぬ雲居にわぶ(心細く暮らしている)と答えよ

小野貞樹

文屋康秀が三河掾になりて「県見にはえいでたたじや(私の任国を見に来ませんか)」と言ひやりける返事によめる

小野小町

わびぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ
(こんなに落ちぶれてわが身がいやになったのですから、根なし草のように、誘ってくださいれば、どこへなりともお供をしようと思ひます)

これ以外の古今集の小野氏の歌も、多くがみなもの寂しい調べをもったものばかりである。それは没落しつつある小野一族の歌の特色であると同時に、そういう歌ばかりを撰んで採録した古今集の撰者達——特にその代表であった紀貫之の、小野氏に対する想いでもあったにちがいない。小野氏も紀氏も古代社会から中古にかけて興隆する藤原氏の隠で一步一步衰亡の道をたどった氏族であった。古今集に載せられている歌人のうちで二割ぐらいが政治的には不遇な紀家の人々で占めており、千百十一首の歌のうちの一割が紀貫之の歌であると言われている。古今集の編さんを命じた宇多天皇、醍醐天皇の時代は、藤原氏の一族の女子を宮中に入れて外戚となるといふ形の摂関政治が一時途切れた時代である。古今集はある意味では藤原氏の権勢に対する抵抗の文学でもあった。そう思って読むと古今集の序文の最後の文章が大きな意味をもってくるのである。

たとえば時は移り、ことは去り、たのしみや悲しみがゆきかよったとしても、この歌の文字だけは永遠に残るであろう。……………この歌集が長

く後世に伝わるならば、歌の本質を理解し、物事の心をわきまえた人ならば、あたかも大空の月を見るように、歌の初めて興った古を仰ぎ、今の世を恋いしたわずにいられるだろうか。

政治的には望みを託し得ない貫之たちの、文学に対する自負が強く迫ってくる名文である。

そして古今集に対する私の個人的な印象では、貫之たち編者は自分たちの歌で古今集の歌の新しい理念を表現し、自分たちの政治的な不遇さを小野氏の人々の歌に代表させたように思えるのである。とに角、紀氏と同じ運命をたどる小野一族に対し、貫之の想いは同情と共感であったにちがいない。そうした彼らの気持ちは、六歌仙以前のいわゆる読人知らずの歌の中で小野篁だけは別格に扱っていることによっても推察される。篁は読み人知らずの歌の時代に含まれるにもかかわらず、古今集の六首の歌に彼の名が明記されている。目崎徳衛はそのことで「古今歌人の祖という名譽は、篁に与えられねばならない」と言っている。

古今集の篁の歌で最もよく知られているのは、隠岐島に配流された時によんだ次の二首の歌である。

隠岐国に流されける時に、舟に乗りていでたつとて、京なる人のもと
につかはしける

わたの原やそしまかけて（たぐさんの島々を目当てとして）漕ぎぬいでぬと 人には告げよ海人の釣舟

隠岐国に流されて侍りける時によめる

おもひきや 鄙の別れにおとろへて 海人の縄たき漁りせんとは
（考えてもみたことがあっただろうか、こんな辺境で親しい人々とも別れて身も心も衰弱して漁師の使う網をつかって魚をとろうとは）

一族の族長篁が渡唐を拒否して流罪に会うことは、遣隋使小野妹子の後裔としての小野氏にとっては一族の命運を左右する程の大事件であった。同時に藤原氏の實力をはっきりと思い知らされたことであろう。この事件を契機として都で望みを失った小野氏の神人や猿女は、続々と奥州に流れて行ったにちがいない。そして彼ら彼女らの唱導文芸の題目に篁の配流が付け加えられたのである。おそらく当時十六歳頃であった小町にとっても、隠岐島へ流される篁の姿と一族の悲歎は深く心に焼きついたにちがいない。横田幸哉は「わたの原やそしまかけて」の歌と小町の「おきのゐて身を焼くよりもわびしきはみやこでしまの別れなりけり」を、本来は贈答歌であったとして、これが「小町の父を明示する的確な史料」であると言う。

領送使にせき立てられ、寒風を衝いて遠く山陰道を西へ西へと進み、目的地の隠岐島へ流される。その悲劇の人を慕って、「身を焼くよりもわびしい」と叫ぶ少女小町の心境はあまりにも心細く、痛々しかったに違いない……。歌の内容から吟味される限りにおいても、両者の関係は肉親であり、親子であり、共に承和の流罪事件に巻き込まれた悲劇の主人公であったのである。（七十二〜七三ページ）

横田は二つの歌を篁と小町との贈答歌としているが、小町の歌は「古今集」では「おきのゐ、みやこじま」という地名を読み込んだ物名歌であり、篁の歌は羈旅歌である。横田はいつの間にか両者の関係は人々に忘れられてしまったようであるというが、それ程のドラマを込めた贈答歌の関係が忘れられるはずはない。また「おきのゐ、みやこじま」が隠岐島をさすというのにも無理がある。横田の説は全くの虚構といわざるを得ない。また

仮りに贈答歌であると仮定したとしても、それだけで両者の関係を「肉親であり、親子であり」と決めつけるのは飛躍であると言わざるを得ない。

しかしこう言ったからと言って、二つの歌が贈答歌であること、二人が親子であることの決定的理由とすることに反対しているのであって、小町が

「おきのゐて……」の歌をよんだ時、小町の脳裏に隠岐に流された篁のことが悲しい想い出として浮かんたであろうことまで否定するつもりはない。配流事件から何年もたち、許されて帰京した篁も再び官に復して、人々の心からこの事件も忘れ去られようとしていた頃、「おきのゐ、みやこじま」という地名を知って、かつての事件と映し合わせて興味深いことと思つて、その地名をよみ込んだ歌を作ったのであろう。小町の胸の中には

かつての日の悲歎がありありと思ひ出されたにちがいない。しかし小町は自分の感情を直にぶつけようとは思はない。遠い悲しみを静かにみつめている小町がそこにはいる。かくして多くの魅力に富んだ説にもかかわらず、

小町が篁の娘であるという確証は何もない。ただ二人の間には普通の親子以上に強い関係があるらしいことは推測できる。

ここで私は、私の主張である「小町は篁を想い深く凝視していた」という説の根拠を示したいと思う。最初に私は小町の「花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに」というあまりにも有名な歌は、小町が自らの容姿が衰えいくのを歎いたのでも、単に桜の花が散るのを惜しんだのでもないと言った。この歌にはもっと深い感慨がこめられているのである。

古今集の最も古い「読み人知らず」の時代の歌の中で、小野篁の歌だけには作者名が書かれており、紀貫之ら古今集の編者にとって篁は特別の意味を持っていたことを示している。漢詩文全盛の時代にあって、その当代随一の才をもちながら、当時は埋れ木のようにうずもれてしまっていた和

歌の伝統を篁が守ったからという意味だけでなく、篁の配流事件は、同じ古代豪族の紀氏にとっても、自らの衰亡していく運命の前兆でもあった。今は散逸してしまひそのほんの一部が「和漢朗詠集」に入っている長篇の漢詩「謫行吟」は、当時の人々に愛唱されて余りあるものであったと言われている。

渡口の郵船は風定まで出づ 波頭の謫処は日晴れて看ゆ

（渡し場に停泊している渡し舟は風が静まるのを待って出帆し、自分がかれから流されて行こうとしている海上はらかな配所は、日が晴れるにつれて鮮かに見えてくる。）

隠岐島に流される舟からよんだと思われるこの漢詩と全く同じ時の和歌が先にあげた「わたの原八十島かけてこぎ出でぬと人には告げよ海人のつり舟」である。漢詩の方はわずかに二行でなんとも評価のしようがないが、感情が表に現われずに明らかに叙景描写をしており、和歌の方は万感迫る想いを他人に訴えている。篁にはこのように雄大な叙景的な面と多感な、抒情的な面をもっていた。篁を想い深くじっと見ていた小町の歌の基本基調も篁と同じようなものであったと私には思われる。ただ小町は篁のようにその二つを分離せずに、自らの自我のうちに統一していたのであり、そこに小町の「認識」があった。

古今集には篁の歌は六首載せられており、その最初のものが巻第六の冬歌にある次の歌である。

梅の花に雪の降れるをよめる

花の色は雪にまじりて見えずとも 香をだに匂へ人の知るべく
（花の色が白いので雪と見分けがつかなくても、せめて香りなりとも匂っておくれ、どこで咲いているか分かるように）

一方、小町の古今集の十七首のうちで一番最初の歌は、巻第二春歌下の有名な「花の色は移りにけりないたづらに我身世にふるながめせしまに」である。古今集に載せられた二人の最初の歌が「花の色は……」で始まることは、ただ古今集が季節の歌からはじまるための偶然だとは、私にはどうしても思えないのである。小野小町と小野篁に対し特別な感情を持っていたらしい撰者たちがある感慨を抱いてこの歌を二人の最初の歌としたと思うのは考え過ぎであろうか。私の知る限り今までそのことに注目した人がいないのは、篁は冬歌で梅をうたい、小町は春歌で桜を歌ったから、二つの歌を全く別のものと考えていたからなのである。しかし小町が「花の色は……」と歌い出した時、彼女の脳裏にあったものは、散りゆく桜の花でも、衰えゆくわが容姿でもなく、篁の「花の色は……」の歌だったのである。もちろん小野一族の族長で、しかも当代随一の詩人のうたは一族の全てにとつての最大関心事であつた。しかも「想い深く篁のことを凝視していた小町」にとつて篁の歌はもっと大きな意味を持っていたのである。小町の歌に漢詩の影響が指摘されているが、私の立場からすれば当然と言わなければならない。恐らく一方的なものではあつたけれど、ある意味では小町の歌は篁の歌に対する贈答歌であつた。

篁の「花の色は雪にまじりて見えずとも香をだに匂へ人の知るべく」はやがてめぐり来る春への期待がある。一つ一つの歌をこれは青春の歌これは老年の歌と人生史の中に位置づけることは警戒しなければいけないが、この歌には確かに早春とも呼ぶべき若々しい春への期待がある。多感な青年時代を送った篁の、それは不気味に迫ってくる藤原氏という暗雲をはらいのけてくれる、めぐりくる春への期待であると同時に、この歌を聞いた小野氏の人々は、やがて一族の長ともなるべき青年篁に、頼もしくも力強

い期待を寄せたにちがいない。人々の期待にたがわず篁は二十一歳で文章生、二十九歳で蔵人、三十一歳で従五位下そして三十三歳にして、小野妹子の後裔小野氏にとっては最大の名誉である遣唐副使に任ぜられた。しかし藤原氏の権勢をかさに着た大使藤原常嗣の横暴な乗船交換に抗議して病と称して上船を拒否、彼の抗議は「文徳実録」にも「執論確かなり」と記されている程正當なものであつたが、遣唐使の制度を諷刺する詩を書いた為に嵯峨天皇の逆鱗にふれて隠岐島に配流になることは前に触れた。

それは篁に一族の命運を決する期待をかけていた人々にとってまさに青天の霹靂であつた。藤原氏の實力は決定的なものとなり、一族の将来に望みを失つた小野氏の神人や猿女たちは、続々と奥州に下つていったにちがない。やがて篁の才能を惜んだ嵯峨上皇によって篁は許されて都によび戻され、官に復する。その後も上皇に重んじられたが、それは篁個人のことであつて一族の衰亡はもはや明らかであつた。空海と並び称された程の偉丈夫も、藤原氏の力の前に思う存分に實力をふるえなかつた。

物の色は自ら客の意を傷ましむるに堪へたり 宜なり愁の字をもて秋の心に作れること

（自分の身の周りにあるすべてのものが、自分の心を傷ましくさせる。本当にその通りだなあ、愁という字は秋の心だということとは）

この篁の漢詩は和漢朗詠集にあり、一説に隠岐に流された時の詩であると言うが、たとえ配流中に作られたとしても、その後の生涯にわたる篁の気持ちであつたろう。

少女の頃から想い深く、篁だけをじっと凝視していた小町は、篁の、「花の色は雪に交りて見えずとも香をだに匂へ人の知るべく」という春への期待の歌が、彼のたぐいまれな才能と情熱によって見事に開花していく

のをあこがれに満ちてながめていた。しかし思いもかけぬ出来事によって
篁の運命が激変し、篁の若々しい春への期待が、やがて秋の心となって愁
に沈んでいくのを、想い深くじっと見つめていた時、いつしか篁の二つ
うたが彼女の中で一つになって新しく蘇ったのである。

花の色は移りにけりないたづらに我身世にふるながめせしまに

したがってこの歌は、篁の人生の移ろいをうたったのであり、小野一族
の運命の移ろいをうたったのであり、そしてそれをじっと見つめている小
町自身の、「ながめせし間」に移ろい行く人生をうたったものなのであ
る。

小町の歌を好色・驕慢な若い頃、盛りをすぎた中年、すがれはてた老年
と人生的に区別することに私は反対である。小町は青春時代においても
十分に老いていた。だからこそ古代の終末を歌うことが出来たのである。
「わびぬれば身をうき草の根をたえて誘う水あらばいなむとぞ思う」この
歌が小町の三十歳前後の歌であってもいっこうに構わない。若くしてすで
に老いていたからこそ、そこに永遠の若さがあった。新しい時代の誕生を
告げる歌よみとなりえた。小町とてささやかな恋をしたかもしれない。し
かしその恋を通して小町は、恐らく自分を恋愛の対象とはみてくれない篁
を見ていた。

小野小町

今はとてわが身時雨にふりぬれば 言の葉さえもうつろひにけり

返し

小野貞樹

人を思ふこころ木の葉にあらばこそ 風のまにまに散りも乱れぬ

この歌をもとにして田中喜美春は「小町時雨」で小町と、同族の小野貞
樹との恋愛をいい、小町のほとんどの歌が貞樹との恋とその破局を歌った
ものとする。目崎徳衛は小町の歌を「女の盛りを過ぎた小町が、通う足も
間遠になった男の心をつなぎ止めようとした哀訴である」と言う。私は秋
山虔の言うように小町の歌は贈答歌ではないと思っているが、仮りにそう
であるとしても、男の心をつなぎ止めようとした哀訴とは思えない。何度
となく言い寄る貞樹に小町は色の良い返事をしなかった。あきらめかけた
貞樹の心の隙をつくように「今はもう私の身が末枯れ果てたので、あなた
の言葉も昔と変わってしまったのですね」と半分冗談まじりに呼びかけた
のかも知れない。それに対して貞樹はぶ然として、「あなたを想うわたし
の心が木の葉のようなものならば、風のまにまに散り乱れるだろうが、あ
なたを想う私の心はそんなものではないですよ」と返しているのである。
むしろ、心変わりしてしまったのですねと言う小町の方が冷たく、貞樹の
方が激しい。そして実際にはこの小町の歌は贈答歌ではなく、「人の言葉
というものは移ろいものだ」という小町の認識の歌なのである。

文屋康秀が三河掾になりて、「あがた見にはえ出立じや」と、

いひやれりける返事によめる。

わびぬれば身をうき草の根を絶えて さそふ水あらば去なんとぞ思ふ

「花の色は……」と並んで小町の代表作とされている歌であり、一緒
に任国へ下りませんかと誘った同じ六歌仙の一人である康秀に対して小町
が「こんなに落ちぶれてわが身がいやになったのですから、根なし草のよ
うに、誘ってくだされば、どこへなりともお供しようと思ひます」と答え
たので、目崎は、真淵が「かくのみ云ひて、え行かぬよしを云はぬぞよ
き」と評したのを受けて「たしかに全体に打興じたような調子も感じら

れ、いわば男の気紛れな誘いに対してさりげなく気楽に答えた挨拶といった風である。ただそうした仮初の挨拶の底には、やはり小町の身の憂さわびしさがあって……『色みえて』や『秋風に』の過渡期が過ぎ去った後の老年の生活ではなかったか」と言い、通説も大たい同じような意見である。しかし私は小町の「わび」を「老年のわび」ととらえてしまうと、小町の心の底の「わび」をとらえそこなうと思う。青春のわびというものもあるし、女は三十を過ぎれば十分にわが身をわびしいと感じるものなのがある。この歌も小町を老年とする必要はすこしもない。心が通い合う仲間だからこそ小町も「行きたいですね」と答えたのであり、来てくれるはずもない小町を誘った康秀の方がむしろ切なく寂しい想いをしていることだっているのだ。

小町はこうして篁の歌のサロンで、心の深い女性として多くの男たちに心ひそかに愛されていたにちがいない。しかし彼女は、小さな恋はしたかもしれないが、特定の誰れかと関係を結ぶこともなく、古代的な英雄、小野篁を想い深くみつめていたのである。そしてその奥に、人間そのものの運命を見すかしていたにちがいない。それ故に現実の小町は、若くしてわびぬる小町であった。小町の「わび」は古代という時代の「わび」であった。小町の歌は個人の経験よりも、もっと深いところでおこった。認識の問題ではなく存在の問題なのである。小町は衣通姫伝承の中で、新しい衣通姫として、古代の終焉に立って伝統的な歌をうたっただけである。しかしそれは新しい時代を告げる「我身」Ⅱ「移ろう」という認識であった。確かな我身の自覚とは、実は我身が移ろうことの、わが身のもろさの自覚なのである。後の世の歌よみや宗教者はそれをいかに深化するかということが課題になった。あまりに大きなものを見つめるが故に、現実には拒否する女であらざるを得なかった小町は、それ故にこそ夢の中では大ら

かに激しい観念の恋をすることが出来たのである。

ここまで来て私は、小町は絶世の美女であるという俗説を受け入れようと思う。しかしそれは小町の容貌が美しかったからという意味ではなく、人間であるということの栄光と悲惨さが、小町という名もない女性の上に体現されており、はかない美が、永遠の姿をとどめているからなのである。現実の小町は篁の死と共に忘れられ、自分が小町であったことなども忘れて死んでいったであらう。そしてやがて小町の心の底深くで起こったことが、小町の現身に起こったこととされ、絶世の美女・好色・驕慢・零落・流浪などのさまざまな伝説として人々の心の中でふくらんで行ったのである。

注

- (1) 関谷真可彌『小野小町秘考』（昭和八年刊）雄山閣
- (2) 窪田空穂、日本古典全書『小野小町集』朝日新聞社
- (3) 窪田章一郎校注『古今和歌集』角川文庫
- (4) 前田善子『小野小町』（昭和十八年刊）三省堂
- (5) 片桐洋一『小野小町追跡』（昭和五〇年刊）笠間書院
- (6) 角田文衛『王朝の映像』『小野小町の実像』（昭和四十五年刊）東京堂
- (7) 日崎徳衛『在原業平・小野小町』（昭和四十五年刊）筑摩書房
- (8) 秋山虔『王朝女流文学の形成』『小野小町的なもの』（昭和四十一年刊）塙書房
- (9) 竹西寛子『古今集・業平・小町・王朝秀歌選』、『国文学』昭和五十八年七月号
- (10) 唐木順三『無常』（『全集』第七卷）筑摩書房
- (11) 赤羽根龍夫「鬼と女」（神奈川歯科大学「基礎科学論集」第二号）参照
- (12) 『日本の歴史5』『王朝の貴族』（中央公論）8ページ
- (13) 小林茂美『小野小町攷』（昭和五十六年）桜楓社
- (14) 唐木順三『日本人の心の歴史』（『全集』第十四卷）
- (15) 岡一男『古典と作家』『小野小町新考』（昭和十九年）文林堂双魚房

(16) 横田幸哉『小野小町伝記研究』(昭和四十九年刊) 風間書房

(17) 田中喜美春『小町時雨』(昭和五十九年) 風間書房

(本学助教授)